信州大学 SHINSHU UNIVERSITY | 教育学部 附属長野小学校

２年２組

山羊といっしょに暮らしたいな
～ミロちゃんといっしょ～

子どもの内からでる歌声

ロロとお別れをしました。ミロの発情がこないことが確認され、おそらくミロは妊娠していると思われたためでした。三ヶ月間一緒でした。カールした前髪、ふさふさの髭、ちょっと小柄で青い首輪がよく似合うロロ。みんな大好きでした。

歌「ロロ　ありがとう」
ロロと出会ったときは まだ小さくて
頭突きはしないけど よくかんだ
やさしくてかっこいい チモシーをいっぱい食べる
ミロといいコンビ なかよくなれた
散歩がちょっと大変で　力も強くなってきてて
いつもミロを探してて　追いかけっこしてるみたい
ありがとうロロ お父さんになってくれて
ありがとうロロ 交尾してくれて
元気でねロロ 忘れないでね
次は会いにいくからね

音楽会の最後に歌ったこの曲は、みんなのお気に入りの曲です。音楽の先生から、初めてこの曲をもらった時には、子どもたちが思わず涙も流すほど、切なさが込み上げました。進む音楽会練習、歌い込むたびに近づくロロとの別れ。その切なさは、日を追うごとに増していきました。

２月６日（月）、ロロのお別れ会。この日だけは、ロロにいっぱい食べさせてあげようと子どもたちがたくさんのごちそうを用意しました。最後に散歩をしたいと自然体験園をたくさん散歩しました。いつまでも忘れないように写真も一緒に撮りました。さようならを伝えたくて身体をたくさんさすりました。あっという間の１時間でした。会が終わって、いよいよお別れの時、帰りの支度を済ませた子どもたちがロロを乗せたトラックに駆け寄りました。「ロロ、バイバイ」「ロロ、ミロと結婚おめでとう」「ロロ、電車遅れてもいいから、ずっと一緒にいるよ」子どもたちからたくさんの声が掛けられます。たくさんの声の中、「ここで歌いたかった」と SM さんが突然呟きました。すると隣にいたＹＭさんが「ありがとうロロ」とあの曲を口ずさみ始めます。そのワンフレーズが呼び水となって、周りの子どもたちも歌い始めました。Ｉさんが指揮者になって、さらに歌声は広がっていきました。その歌声は、伴奏もなく、揃ってもおらず、体育館では響かないであろう大きさの歌声でした。でも、それはまさしく子どもたちの内からでた歌声でした。ロロに最後の思いを伝えようとする、なんとも切なく、そしてなんとも温かい歌声でした。きっとこの歌声は、ここでしか聞くことのできない特別な歌声だったのだと思います。

国語では、「スーホの白い馬」を読み合っています。昔から教科書に掲載されている読み物です。私も当時のことを思い出しながら、学習を進めていたのですが、子どもたちと学び合う中で、考えさせられることがありました。そんな姿を紹介させてください。

「なんで白馬は羊を守ったのか」

授業は、初めて読んだ時に感じた思いや疑問をもとに進めています。この日は、成長した白馬が襲ってきたオオカミから羊を守る場面で、「どうして羊を守ったのか」ということについて思いを語り合いました。「スーホが大事にしていた羊だから」とＳさん。「羊がいなくなったらスーホが暮らせない」とするＫさん。いずれも命を救ってくれたスーホへの想いから行動したのではないかという考えです。一方、「スーホを見て、自分も（スーホみたいに）なりたいと思ったから」とＭさん。「スーホと同じやさしい気持ちがあったから」とするＫさん。一緒に暮らす中で、白馬の中に位置づいていったスーホという人物像への着目です。また、絵に注目した子もいました。「絵の羊はお母さんと子どもではないか」というのです。確かに手前が子ども、奥が大人の羊のようにも見えます。そこから、「お母さん羊が食べられたら、子羊を育てられない」とＴさん。さらに「自分（白馬）にはお母さんがいない。その寂しさをさせたいくないと思ったんじゃないか」とＨさんが続けました。羊を自身（白馬）の姿と重ねたのではないかというのです。この発言を聞くと、「それってスーホも同じじゃん」、「あれ、ミロも同じだよ」と子どもたちが発し、考えが発展していきました。

「とのさまは、どうして約束をやぶったのか」

次の日。競馬大会に出場する場面の学習です。初めて物語を読んだ時の子どもたちの疑問は、もっぱらここで登場する殿様へと向けられていました。「殿様は、どうして娘と結婚させるという約束を破ったのか」という疑問です。ここでも子どもたちからたくさんの考えが出されました。「白馬が欲しくなっちゃったんだよ」とＴさん。「自分は偉いからなんでもいいって思ったんじゃないかな」とＹさん。「実は白馬が一番速いとわかっていて、そういう約束をすれば（スーホが）来るとわかっていたからじゃないかな」とＨさ

ん。「（絵で）お酒を飲んでいるから酔っ払っていたんじゃないかな」とＹさん。子どもたちの叙述や絵をもとにした考え、そして発想力の豊かさに感心させられました。さまざまな考えの中で、一番多かったのは、叙述にもある「貧しい身なりの少年の羊飼いだから」というものでした。私もこの一文が重要な文だと感じます。「貧しい身なりの少年を馬鹿にして、約束を破った」といったところでしょうか。ですから、子どもたちの最初の感想では、「殿様は、ひどい」と何人もの児童が思いを綴っていました。ただ、この一文を考えの拠り所にしながら、違った読み取りをした児童がいました。Ａさんです。「貧しい身なりの羊飼いだったから娘の婿にすることを知らんふりしたのだと思いました」とノートに書いていたのです。この文には、単に「貧しい身なりだから」にとどまらない、殿様の心情を見ることができるような気がしました。「娘のことを思うがあまりの選択だったのではないか」ということです。そこで、Ａさんの考えを紹介し、「殿様は本当にひどいのか」問うてみることにしました。「やっぱり、ひどいよ」、「約束は守らなくちゃ」とする意見が出される一方で、「殿様は、お金持ちと結婚させたかったんじゃないかな」とＳさん。「娘にはもっといい男がいると思ったんじゃないかな」とＹさん。この日の授業の振り返りでＨさんは、「最初は、殿様が悪いと思っていたけれど、“自分が殿様だったら”と考えると、約束は守りたいけど・・・」としました。Ａさんの考えから、「貧しい身なりの少年の羊飼いだから」の先、殿様の一面にたどり着いた時間となりました。（もちろん、授業の終末では、「なら、そもそもそんな約束しない方がいいじゃん」、「結婚は、娘の気持ちが大事なんじゃないの」、「男は、身なりじゃなく、性格だから」と話題が駆け抜けました）

このように「スーホの白い馬」の授業を進める中で感じるのは、子どもたちの多角的なものの見方です。一つの問題に対して、さまざまな角度から答えを見出そうとしています。また、面白いのは、言いっぱなしではないということ。対話を重ねる中で、解釈が広がっていくことです。〇〇ちゃんの言っていることが、自分の中に入ってきて、自分の見方で再考することで、その考えが発展し、自分のものになっていく。そんな感じを受けました。子どもたちってすごいなと感じています。

新しい環境で

新しい小屋が完成しました。１年生の基地作りから数えると３度目の小屋作りでした。「まず柱を立てる穴を掘ろう」、「壁や床は、壊す時のことを考えて釘は１本ずつ打っていこう」、「ここはミロが出ちゃいそうだから板を張ったほうがいいよ」。建設現場からは逞しい子どもたちの会話がたくさん聞かれました。また、そのように新たな小屋を建てる人がいる裏で、元の小屋を解体した木材を「わっしょい、わっしょい」と力を合わせて何度も何度も新しい小屋へと運ぶ人、「１００本以上抜いたんだよ」と解体した木材の釘を一本も残さずに抜く人、「ミロのうんちが今日は固まっているよ」と体調の悪いミロを心配して観察をする人などそれを支える子どもたちの姿がたくさん見られました。自分にできること、ミロのためにできることを真剣に行おうとする子どもたちの姿に成長を感じました。

３月１３日、ミロが新しい小屋へと引っ越しました。環境が変わるということは、少なからずストレスのかかることです。体調が悪かったこともあり、少し心配でした。それでも子どもたちが近くにいるうちは、いつもと変わらぬ様子でしたので安心しました。けれども、やはり心配で、子どもたちが帰った後、少し離れたところから様子を見てみることにしました。すると写真のように子どもたちが作った柵のある運動場から元の小屋の方を見つめるミロの姿がありました。しかも、そこでじっとしているわけではなく、「うーん」と鳴いては小屋の中へ入り、また柵のある運動場へ戻って元の小屋の方を見るということを何度も何

度も繰り返していました。その姿にいてもたってもいられず、ミロのところへ駆け寄りました。朝の雨でぬかるんだ運動場には、数えられないほどたくさんのミロの足跡が残されていました。ミロの足は泥だらけです。きっと私が見にいく前からずっと同じことを繰り返していたのでしょう。水気を嫌う山羊の習性からすると考えづらい行動です。それだけ元の小屋が恋しかったのでしょう。みんなのことが恋しかったのでしょう。「ミロ、おはよう」、「ミロ、キャベツだよ」、「ミロ、いいこだね」、「ミロ、また明日ね」。子どもたちの声の響くあの教室前の小屋。１ 年過ごしたあの教室前の小屋は、ミロにとって安心して過ごすことのできる場所となっていました。このミロの姿は、この１年間の子どもたちの歩みを感じる姿でもありました

　今年度は新しい命を迎え、新たな学びがスタートした年となりました。一つの命を目の前にした時、真剣にそれに向き合う子どもたちの姿がありました。真剣に向かい合うからこそ、ぶつかり合うこともありました。協力しなければならないこともありました。たくさん考えなければならないこともありました。たくさんの出来事が子どもたちを成長させてくれたように思います。一足早く引越ししたミロは、今、新しい環境で一生懸命頑張っています。２組の子どもたちも来年度から ３ 年生。新しい環境での学びがスタートします。これまでの学びを活かしながら、動物たちと共に更なる飛躍をしていってほしいと願っています。